純愛護身教室

玉子王子　著

一章　愛のために強さを見せる

「別に助けたんじゃないよ、あは……男子のここ、蹴りたかっただけ」

　そういって恥ずかしそうにスカートの前を叩いた少女。いじめられかけていた間下浩二を救ってくれた彼女をその日から好きになった。しかし結局小学校卒業で別れた、別れたというか、そもそも付き合っているどころか友人というほどの関係ですらなかったが、とにかく浩二が中学進学を期に引っ越してそれっきりとなった。

　そして今、高校一年。

　初登校の日、教室に入って驚いた、シルエット的には男児と変わらなかった過去とは似ても似つかないグラドルのような「胸にバレーボールの体型」になってはいたが、それでも間違いなくそのややぽったい顔は初恋の少女の面影を強く持っていた。

　――花芝ミチカ……ミチカちゃんだ、間違いない。

「は、花芝さんだよね」

　休み時間話しかける。眠たそうな顔で頬杖をついて目だけで見てくる。

「えーっと、誰？　中学時代の恨み……とかいうなら……」

　ニマ、と急に眼を輝かせ、立ち上がる。

　そしてスカートの前をパン、と叩いて腰を突き出す。

「ここ、大変なことになっちゃうかもね？」

「ぎゃははは！　ミチカなにそれー！」

「いやいや、女の子の私にはよくわからないんだけど、なんか男の子って、ここ叩くとほら……「はぐっ！」とかいって、すごいじゃん？」

　口をしゃちほこのようにして、腰をヘコっと引いて見せる初恋の少女。ブルン、とバレーボール二つが揺れる。

　手を叩く周囲の少女たち。その動きの意味を一瞬で理解し、男子らは鼻白み、目を逸らす。

「はぐっ！　ふおおおお、ってさあ」

「わかるわかる。あがっ！　とかねー」

「なんでなんだろう？　女の子にはわからないわー「タ〇キンがああ！」とか言われてもねー」

「あんた答え言ってんじゃん！」

　突然始まる女子たちによる金責めトーク。

　ここはうさぎ県、表向きはアゼルバイジャンやベネズエラと並ぶ巨大油田がある土地として有名だが、一部の界隈では世界一ドＳ女子の割合が多いといわれる県である。

　手を叩き、笑いつつ周りの男子の足の付け根をちらちら見る。思わず股間を押さえたりすると、周囲の女子がここぞと声を上げる。

「えー！　池葉どうしたの？」

　比較的小柄な男子、池葉。目立つ方ではないが、他の者が女子の目があるのでおずおずと股間ガードに動いたのに対して、素早く防御した池葉に注目が集まってしまった。

　女子がニヤニヤしながら近づいていく。

「そこになにかあるんですかいのう？」

「保護しなくちゃならない、何らかのブツがねー、あるんじゃないですかねー」

「な、な、ないよ」

「きゃー！　ないんだ！」

「うっそー！　玉無し系男子！」

「ポロリしたの？　ねえおキンキンポロリしたの？」

「再生薬あるよ、飲む？　玉無し野郎も数秒で再生だよ」

　彼らの世界は大体我々の世界と同じだが、ナノテクノロジーが一部で高度に発達した社会である。どんな怪我でも一瞬で修復してくれるナノメカ入りの薬がコンビニで安く買える。

　頭が半分吹き飛んでも治るのだ、睾丸ぐらいなら数秒。

　睾丸が潰れるぐらい擦り傷程度に、自分たちには付いていない女の中には考える者もいるぐらいだ。

　そんな女たちにとって、目の前の男子が本当に玉がない状態でもどうということはない、すぐに治るのだから笑いごとでしかない。

　そもそも、実際にないわけではないとわかってもいる。

　ほとんど爆笑するようにからかってくる。顔を真っ赤にする池葉。

「ち、ちが……玉無しはお前らだろ！　なあ浩二、金無しどもに言ってやれ！」

「え」

　池葉は中学からの友人。親しいというほどでもないが、同じ高校の同じクラスになれば、なんとなくつるむ流れはできる。

　突然声をかけられ、初恋の少女の驚くべき振る舞いに面食らっていた浩二は棒立ちになる。

　その間も、時間は流れていく。

「あ、玉無しだって！」

「うわ、酷ーい！」

「女見下してんじゃん！」

「これはめちゃ許せんわなあ、めちゃ許せんわなあ」

　口では怒ったようなことをいいつつ、満面の笑みでクラスの女子の大半が集まってくる。

　青ざめ、離れる男子たちとは対照的だ。

「あ、お、お前らなんだよ」

「いや、なにってことはないけど」

　言いつつ、池葉の胸倉を軽く掴むミチカ。

　とっさに掴み返す池葉。

　その動きを読み切り、スッと足を踏みだすミチカ。

「はうっ！」

　ぐにょ、とミチカの太ももが柔らかい物を押し上げる。

「ひっ！」

「きゃっ！」

「うわ、いきなり金的キック！」

「いやいや、軽ーく押し潰しただけだよ。触れて、押し込んだだけ。でも、わかるよね？　これがで

きるなら、蹴るほうが簡単だってこと。聞いてんの？　ほれほれー」

　女子高生の柔らかすぎる太もも。それに持ち上げられ、振動させられる池葉の最も弱い部分。

「はひいいい！　や、やめ！」

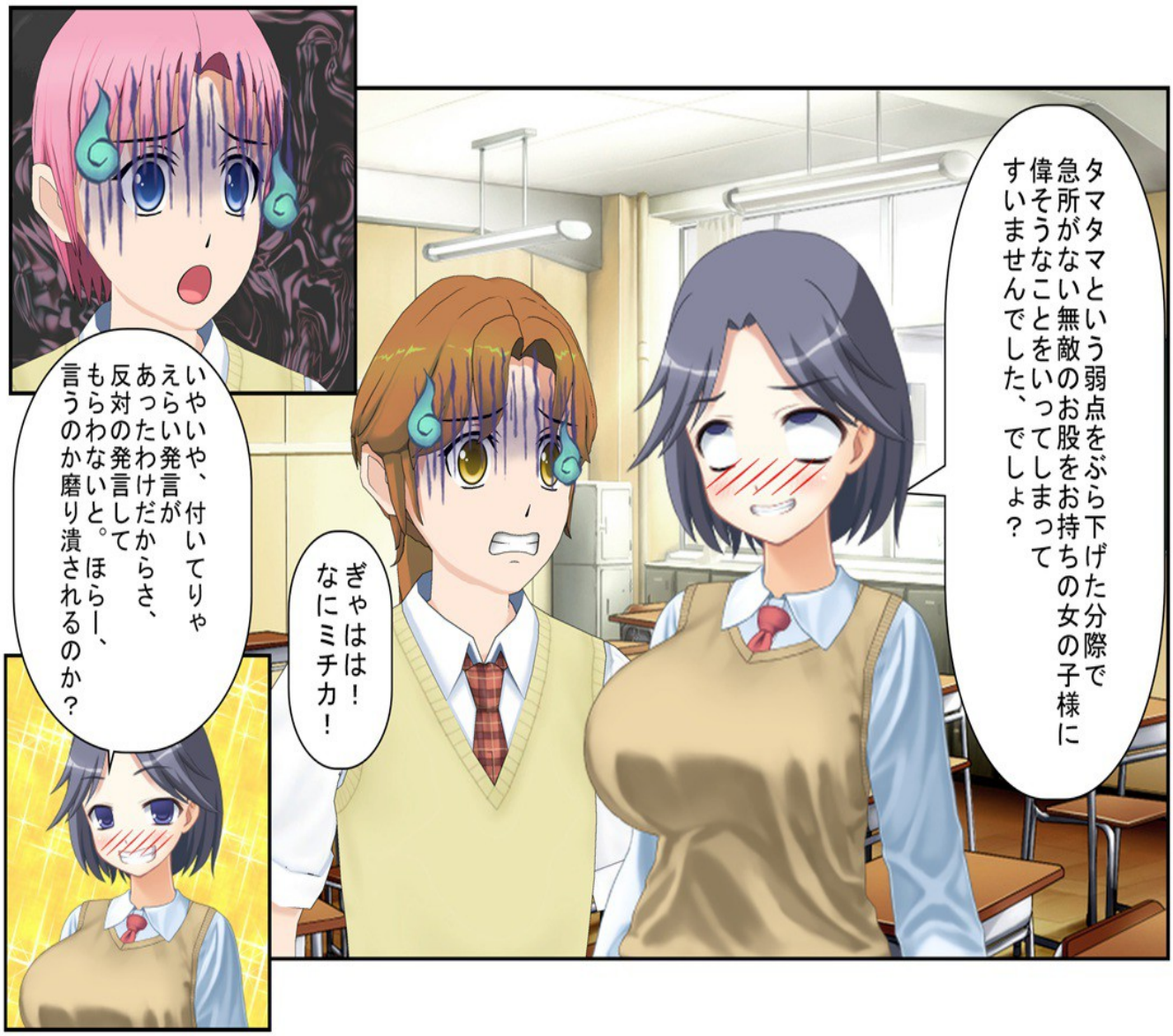
「さっきの女の子を見下す発言……」

「す、すいませんでした！」

「タマタマという弱点をぶら下げた分際で急所がない無敵のお股をお持ちの女の子様に偉そうなことをいってしまってすいませんでした、でしょ？」

「ぎゃはは！　なにミチカ！」

「いやいや、付いてりゃえらい発言があったわけだからさ、反対の発言してもらわないと。ほらー、言うのか磨り潰されるのか？」



「ひ、ひいっ！　き、キ〇タマという弱点をぶらぶらぶら下げた分際で急所がない無敵のおマンマンをお持ちの女の子様に偉そうなことをいってしまってすいませんでした！　玉だけは許してください！　そこだけは痛すぎるのでタマタマだけは許してください！」

「よしよーし、偉そうな男性様も、おキンキンがヤバいとなるとやっと正しい態度が取れるようになるのねー」

楽し気なミチカ。足を下げる。

と、浩二を思い出す。

「で、あんた……あ！　そうか、浩二くんじゃない？」

「お、覚えててくれた？」

「あはは、そりゃね。あの頃は楽しかったから……」

チラ、と浩二の股間を見る。

近づき、耳元でささやく。

「クラスの男子のタマタマは大体蹴ったけど、二三人蹴り損ねたんだ。その一人のことは忘れないよ」

「え……」

「うふふ」

ニンマリ笑いつつ、離れるミチカ。

立ち尽くす浩二。

――思い出の中のミチカちゃんとは違う……というか、記憶の中で美化されていたのかもしれない……でも、そんなに大きくは違わないだろう。離れ離れになって数年、ダメでも告白すればよかったと思ってきた、もう後悔はしたくない。

結構独りよがりな考えながら、数日後浩二は屋上にミチカを呼び出す。

「小学校の時好きだったんだ、再会できたのは運命だと思ってる！　付き合ってください」

そういって頭を下げる。

「な……」

離れて聞いている二人の友人が一人ずつ。

池葉は褐色かかった肌の、ハーフの少女アンネを見る。

「あ、アレどう思う？」

「いや、無茶苦茶っしょ。意味わからない……いや、まあ昔すげー好きだったのかな？　って思うけどさ……」

「ないよな、何年前の気持ちで告白してんだよって」

「再会して数日っしょ？　せめて一か月ぐらい仲良くなろうと頑張って、うまくいってから「実は昔から」って話ならワンチャン……」

ドン引きする二人。

浩二自身、割と自分の行動に納得はいっていない。

少し離れたところの友人らの困惑にも目がいっている。

――ああ、びっくりしてる。そりゃそうだろう。俺だって変な話だなとは思うよ。でも素直な気持ちでもあるんだ。俺は俺のことよくわかってる。下手にミチカちゃんと親しくなったら、その関係壊したくないからって、きっと告白できなくなる。それで高校卒業で別れるか、下手すりゃクラス替えで接点もなくなって、また後悔するんだ。そうなるより、これで振られたほうがまし。

ミチカが好きというより、自分の心の平衡を保つために動いているような割と勝手な話。しかし好きという気持ちは確かにあるのだ。

ミチカは目を剥いていた。

――おいおい、小学校の金蹴り女王時代の私が好きって？　ヤベえよ、ドMじゃん。いや、私も人並み以上のタマタマ責めが好きな女の子として、ドMくんに興味はある。でも、私が好きというより玉責めしてくれる都合がいい女の子と付き合いたいだけなんじゃね？　とも思うな。っていうか、そもそも論として、私、男の人と付き合うってなんかぴんと来ないんだよね。玉責め専用のセフレは欲しいけど、付き合うってのはね……っていうか、それセフレじゃねーな！　ってわけで断るか。

「うーん、別に付き合うのはいいよ。付き合ってもいい」

「え？　うっそ……マジで？」

「でも、一つ言っておきたいんだけど、私あんまり男の人好きになるって感覚ないんだよね。別に女が好きってことじゃなくて……なんて言うか、昔の私知ってりゃわかるでしょうけど、私ね、親が護身術の教室やってて、ずっと習ってるから、知ってるんだよ」

「知ってるって……」

「うん、男の人のね、弱さを」

いって、顔の前に手を上げる。指でリングを作る。

「コレ、浩二くんもぶら下げてんだよね？」

「そ、そりゃ……」

「あは、かわいい。教室に来たらお姉さんたちにかわいがってもらえるよ……多分両方」

「両方？　さ、左右！？」

「きゃはは！　違う違う、いや、違わないけど……両方って言うのは、玉と棒両方ってこと。うちは初心者の小学校ぐらいの子が一通り習うのと、時間がある主婦の人が運動がてら習うのが大体メインの客でね。暇で、結構旦那さんとの関係冷えてきてるお姉さんたち、男の人が来たら同じ生徒でも教える側でも、お股をいろいろな意味で寄ってたかってかわいがるんだ」

「そ、そんな無茶な……」

「まあそんなわけで、子供のころから見てるんだよ、どんな強そうな男の人でも……お父さんも手伝いに来てくれた学生の人たちでも、練習に来た男の子でも、みーんな、女の子がタマタマ狙っていったらどうしようもないって、軽くやられただけで無事死亡、弱くて儚いキンキンボールをぶら下げてるって……」

「それと好きになる感覚がないってのは……」

「だから、ぶっちゃけザコボール所有のザコキャラ好きになるのは難しいって感じかな？　でも一生そういうわけにもいかないから、我慢と練習がてら、付き合ってもいいよ……まあちょっと失礼な話かもだから、断ってくれてもいいけど」

――というか、断るよねこんな話。断るために言ってるけど、別に嘘ついてるわけじゃない。私がどういう人間かぶっちゃけてるだけだもん。もしこんな変な私でいいなら付き合ってほしいけど、そんなの無理だし。あーあ、一生恋愛無理かな。いや、黙って付き合えばいい話だけど、好きになれないのを我慢してってのも変な話だし。

「ちょっとミチカー、ちょっとじゃなくてすげー酷いっしょそれ」

「いやアンネには関係なくね？」

「関係あるっしょ、だって友達だもん」

「そりゃそうかもだけど……でも、こういう感覚隠して付き合うってのもな」

「間下！　こんな金蹴り大好きのヤバ系女やめときな！」

「あ、言ってはならんことをいってしまいましたなあ……というかあんたも玉蹴り大好きでしょうが」

「好きだよ！　間下、私と付き合って毎日蹴らせてよ！」

「え……やだ……やだっ！」

「えー？　なんでよ。小学校の頃にこいつにキ〇タマ蹴られたのが忘れられずに、付き合いたいんでしょ？　それなら別に私でもいいっしょ。私なら普通に男の子を好きになれる！　そしてほら、私のほうが」

　突然、ミチカのバレーボールより一回り大きいビーチボールを持ち上げる。

　目を取られる男子二人。

「オッパイもデカいし。蹴るときは裸で蹴ってあげる。揺れまくるよー、きっと。ね、こっちのほうがいいっしょ？」

「え？　え？　何それ……何それ……」

「まあ玉蹴り目当てならアンネのほうがいいかもね、すっげードＳだから、私と違って」

「ま、口では何とでもいえるよね」

「あ？」

「ここだけの話、ミチカってわざと痴漢にあってさ、金蹴りで悶絶させてキ〇タマ抜いて、それをホルマリン漬けにして保存してるんだよ」

「してるわけねーだろうがよ！？」

「タマタマ再生させて、一人から二〇個ずつぐらい取ってんだよ」

「取ってるわけねーだろうがよ！？　信じてくれるよね？」

「も、もちろん、な、池葉」

「信じる、信じるから！」

「だよね……なんか無理やり言わせてる気がするけど、玉抜いてコレクションとか猟奇殺人者じゃないんだからさ。んな面倒なことしないよ、再生させて踏み潰すを意識飛ぶまで繰り返したりとか、そんな程度の話」

　唾をのむ浩二。

　――あんまりホルマリン漬けと変わらなくねーか？　やべ、チンタマ縮み上がって無くなるぐらいだ……こんな女だったのか……でも……多少ヤバくても、根はいい子なんだ。俺を助けてくれたんだ。いじめを止める口実で金蹴りしたかっただけかも、という疑問もなくはないけど……それでも助けてくれたことは確かだ……やっぱり好きなんだ。ただ付き合うんじゃなくて、好きになってほしい。

「ミチカちゃん、付き合って」

「うん、しょうがないよね。こんな私じゃ……え？」

「付き合って、ミチカちゃん」

「いいの？　私で……えへへ、マジか……うれしい、うふふ……いえーい」

　アンネに向けて、タブルピースのミチカ。

「私は選ばれた」

　満面の笑み。頬を引きつらせるアンネ。

「あー？　別に競争してねえーっしょ？　もともとあんたに告白に来たんだから、競争にも何にもなんねーし。っていうか、まあこんなこと言うのもアレだけど、付き合うからにはちゃんと誠意をもって付き合うのよ。男の子好きになれないとか、あんたの都合なんだし」

「わかってるよ、ちゃんと彼女として……」

「あ、それだけど……俺、好きになってもらえるように頑張るつもりだ」

「そりゃそうでしょ」

「だから、俺君の家の護身術教室に通わせてほしい」

「どういう事だってばよ？」

　思わず、アンネの方を向くミチカ。

体験版終わり

続きは製品版でぜひお楽しみください